



Title	昭和初期に通った懷徳堂
Author(s)	杉村, 光子
Citation	懷徳. 1984, 53, p. 101-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90635">https://hdl.handle.net/11094/90635</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

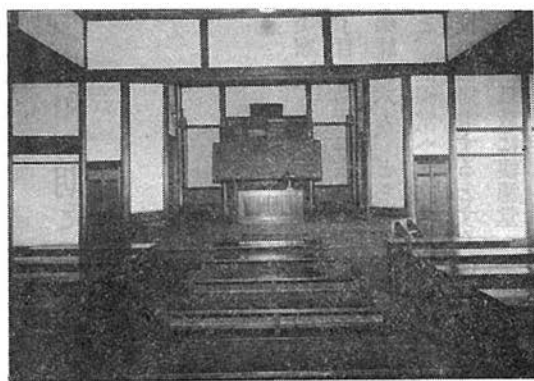
## 昭和初期に通った懷徳堂

杉 村 光 子

私の実家は、当時元の懷徳堂とは東横堀川をへだてて西へ一丁目の場所に住んでいた。私の兄弟姉妹六人、隣には従弟妹が六人、どちらの家でも子供が小学校四年生になると、懷徳堂へ漢文の素読に通わせる事になっていた。学校から帰宅するとすぐに和綴じの孝経その他を持たせられ、一目散に懷徳堂へかけて行くのが日課の一つになっていた。本町橋を渡るとき、中程に四角にへこんだ所があり、其所に大体いつも乞食がすわっていた。この人の前を通るのが一番の難所で、この人がここにいる為に、吾々子供達は一生懸命に橋をかけぬけて走った。左にまがると懷徳堂のおごそかな門が建っていた。門を通ると正面にはよりおごそかな玄関があった。額がかかっていたのではなかったかと思う。扉は大抵閉っていた。素読のクラスの教室は左にまがると脇の入口があり

薄暗い廊下のはじめの部屋であった。長い板の机があり、長い板の腰掛で、空いている席に、その板をまたいですわり、おじぎを一つして持参した本を開き、前回読方を教えていただいた箇所を、大声を上げてよんだ。十人位はすわれたようだと記憶している。一杯つまっている時には仕方がないので後に立って誰か帰るのを待っていた。普通は五・六人が並んでそれぞれに読んでいた。この素読のクラスでは、後に母からきいた所によると、四書だけであろうという事であったが、或いはそれ以上のものを読む程長くは続けることをしなかったのではないのであろうか。私は四年生から六年生の夏休み前迄の間に孝経、中庸、大学、論語と読み進み、次は孟子と先生がおっしゃったと覚えている。論語までは和綴の古くなっていたくろっぽい本を持たせられ、それらの本にはか

えり点、一二三のしるし等漢文を日本読みにするのに便利なマークがついていたが、次に渡された本は支那本でかえり点など一切なくて漢字ばかりがづらづらと並んだ本であった。全く閉口してしまった。先生は「この本は支那の本やからなかなかよい本や。大事にしなさい」とおっしゃった。私が結婚した後、母が送ってよこしてくれた手箋筒の中にこの本が入っているのを発見した時、



(重建懷徳堂講堂内部)

懷徳堂の辺りの思い出が彷彿と湧き、戦争中に失くってしまったあの建物の景色を目の前に見る思いをしたことであった。

当時の教授法は現在の学校の授業方法になじんでいる吾々には想像もつかない。あの頃は髭の黒い先生が、めくら縞の着物に木綿の袴を召して、三・四十握の竹の棒で机の向う側に立って、一人一人にそれぞれが読んでいる箇所を、先生の側からではさかさまに字を指しながら読み方を大きな声で教えて下さった。私は現在教師をして居り、クラスの中で私語に熱心な学生の雑音に悩まされてほとほと閉口している自分を考えると、小さな部屋の中で数人の弟子がそれぞれに自分の本を大声で読んでいることを一人一人と聞き分け、間違っていると、サッとその前に現れて正しい読み方を教えて下さった当時の先生の魔術に近い教授法は、思い出す毎に不思議の感に打たれる。どうすれば数人がそれぞれ別々の事を言っているのが分るのか、昔の弘法大師の物語の通りだったと思う。不思議な先生であった。当時の私は十一、二歳で「先生」という以外先生のお名前も覚えていないし、うかがい度いとも考えず、週二、三回のクラスに通っていた。読ませていただいていた四書にどんなむづかしい内

容が含まれているのか、その本にどんな価値があるかなどは考えもしなかったが、漢文をよむという事に馴れていたことだけはたしかだった。後年私は英語を専門とする事になり、当時の専門学校では教科の中に漢文があり、十八史略を教科書に用いていた。私は素読は苦勞なく、クラスマートが困ると、先生に「その先を読みなさい」と名指しされ、半分得意、半分気まりの悪さを覚えながら素読をした。しかし解釈をするという段階になると意者の私はよく出来ないで「君は読むだけか」としかられて恐縮したものだ。今当時を思い出すと、懷徳堂で教えられた素読という作業が私の体の中に住みついていて、それを日本語との関連に於て解釈しなければならぬという観念は湧いて来ないようだった。従ってそういう予習をしなかった。

戦争が終結し平和がもどった頃私は自分の子供達を育てていた。或時ふと思ひ立ち夏休みでもあったので古い孝経の本を取出し、「素読を教えてあげるから、お母さ

んについてこの本をよみなさい」とやりはじめたが、これは不成功に終り子供達について来なかった。私は時代が違ふのかなと簡単にあきらめてしまった。

「身体髮膚之を父母に受く。あえて毀傷せざるは孝のはじめなり」という句を子供達に分つてほしいというのが私の下心であった。親の私が自分に親孝行を要求しているような気がして強制出来なかったのが当時の私の思いであった。昭和三十年頃の事である。しかしこの当時の子供も皆大人になり、私自身も老境の仲間入りをする此頃、懷徳堂へ当然のことに通ひ素読をさせていた。だいた教育は、何の役に立っているとはっきりと言うことは出来ないかも知らないが、何かしら私の体内で一つの要素のようなものになって生きつづけて来たように思う。

半世紀も昔の私の育った船場辺りの家庭教育の一つのあり方であった。